

短期交換留学プログラム参加者に対するフォローアップ調査 —日本語を専攻する中国からの元交換留学生へのインタビュー調査—

吉野 文

Follow-up research on former exchange program participants:
A case study of a group interview with Chinese students whose major was Japanese

Aya Yoshino

要旨

本稿では、千葉大学短期交換留学プログラム（J-PAC）の修了者に対するフォローアップ調査の一環として行ったインタビュー調査の結果を報告する。本学のプログラムで数多く受け入れてきた日本語を専攻する中国の学生を対象を絞り、留学中の経験をどのように評価しているか、修了後1～11年後経過した6名の協力者から話を聞いた。

インタビューでは、学業、学生交流、日本・日本人についての知識・理解、ものの見方などが取り上げられ、概ね肯定的な評価をしていることがわかった。留学時の自らの行動や感情を省察し、当時の経験や認識を相対化して捉え直すコメントは、帰国後の、特に社会人としての経験が留学経験の再評価に結びつく証左と考えられる。プログラム終了時のアンケートだけではなく、長期的な視点からもフォローアップ調査を行い、プログラムの評価を考えることも必要であると言える。

Abstract

This paper is a report on a follow-up study of former exchange program participants at Chiba University. It focuses on how Chinese students whose major was Japanese evaluate their experience in Japan through a group interview. Six informants discussed their study, relationship with Japanese students, their views and knowledge of Japan and Japanese people and how their viewpoints changed during their stay at Chiba. They reflected on their behavior and emotions and, in their comments, indicated how they have integrated their experiences and perceptions during their study in Japan, relating them to their subsequent academic and professional careers. The viewpoints gathered in this study suggest the importance of long-range follow-up studies in addition to the questionnaires ordinarily completed by students at the conclusion of their exchange programs.

1. はじめに

1994年に当時の文部省が策定した「短期交換留学制度」(翌年より「短期留学推進制度」に改称)(野水 2006)に基づき、千葉大学では日本語で行われる授業に参加することを前提とする分散受入れを1995年に始め、翌1996年には英語による授業を提供する特別プログラムとして「短期留学国際プログラム」(J-PAC: Japan Program at Chiba)を開始した。

協定大学から派遣される学生を1年間受け入れるこれらの制度は、その後幾度かの見直しを経て、現在はいずれも学部生を対象とする、「国際教養プログラム」と「日本研究プログラム」を開設し、両者を合わせてJ-PACと呼ぶようになっている。前者は、日本の文化・社会に関心があれば、専門を問わず参加できるプログラム、後者は、日本語や日本研究を専攻する学生で、日本について日本語で学ぶことを目指す学生を対象とするプログラムである。いずれも2学期間または1学期間の全学プログラムとして運営されている。

「留学」の在留資格を持って来日し、1年以内の教育を受けて単位を修得したり研究指導を受けたりする、J-PACのような短期留学生の数は、2014年5月現在、全国で14,793人に上り、高等教育機関の留学生全体の約1割を占めている(日本学生支援機構)。一方、「留学」の在留資格を持たずに来日する、滞在期間6か月未満の外国人学生のための短期教育プログラムも近年増えてきており、2014年度中の参加者は11,428人(同上)と、数の上では「留学」の在留資格を有する短期留学生と肩を並べるまでになっている。

このように学位取得を目的としない海外の学生を受入れるプログラムが多様化する中、開設から20年を経過した千葉大学のJ-PAC¹⁾についても、その意義を改めて問い直し、派遣元大学・受入れ大学の双方の学生にとって、より有意義なプログラムとして位置づけていく必要がある。プログラムでは、毎年2月と7月に帰国前のプログラム参加者にアンケートを行い、留学の動機、受講した授業、教職員・チューターのサポート体制、寮、日本人学生との交流機会、学習成果に関して、評価やコメントを得ているが、帰国し、派遣元の大学を卒業した後の元留学生からまとまったフィードバックを得たことはこれまでなかった。大学を卒業し、社会人となった元留学生は、学生時代の1年間の短期留学を今どのように評価しているのだろうか。また、元留学生からのフィードバックはプログラムの改善に向けてどのように役立つだろうか。

J-PACの参加者の出身国、専門は多岐にわたるが、これまで最も多く受入れてきたのは、中国の大学で日本語を専攻する学生たちである。小稿では、上記の問いに答えるために彼らを対象に2015年3月に北京で実施した聞き取り調査の結果を報告する。今後のプログラム運営、フォローアップ調査のあり方を考える上での一助としたい。

2. 調査の概要と目的

2. 1 中国からの日本語専攻学生の受入れ

中国の協定大学からの日本語専攻の短期留学生の受入れは、1995年に短期分散受入れが開始されてから毎年継続して行われてきた。筆者がJ-PACのコーディネートを直接関わる

ようになった 2003 年以降の受入れ状況は表 1 のとおりで、この 14 年間だけでも計 101 名の日本語専攻の学部生、院生が短期留学生として千葉大学で学んだことになる。2006 年度までは同一大学から毎年 6～7 名の学生を受入れていたが、派遣元の協定大学数が徐々に増え、2013 年度に大学院生を J-PAC で受入れることを止め、研究科に直接入学させる仕組みに変えた後も、2014 年度以降は毎年受入れ数が増えている。

表 1 中国からの日本語専攻学生の受入れ数および派遣元大学数

受入れ期間	学部生*	大学院生	計	派遣元大学数
2003 年-2004 年	4	2	6	1
2004 年-2005 年	4	2	6	1
2005 年-2006 年	5	2	7	1
2006 年-2007 年	4	3	7	1
2007 年-2008 年	3	4	7	2
2008 年-2009 年	3	4	7	2
2009 年-2010 年	5	2	7	3
2010 年-2011 年	3	1	4	1
2011 年-2012 年	3	1	4	3
2012 年-2013 年	2	2	4	2
2013 年-2014 年	3		3	2
2014 年-2015 年	9		9	4
2015 年-2016 年	13		13	5
2016 年-2017 年	17		17	6
計	78	23	101	

*学部生の中には協定大学から派遣された日本語・日本文化研修留学生（国費）も含まれる²⁾。

J-PAC は応募時に学部 2 年生以上であることが条件となっており、中国からの日本語専攻学生は、学部生の場合でも 2 年以上の日本語学習歴を持って留学してくる。漢字圏日本語学習者であるのに加え、協定大学で選抜された優秀な学生であることから、総じて日本語能力は高く、来日時には日本語能力試験 N2 から N1 の能力を有している。また、このグループの特徴として、同じ大学から学生が複数名プログラムに参加することが多いこと、短期留学から帰国した後、本学の修士課程、博士課程に学位取得のために進学した人が、過去 10 名以上おり、修了後に中国または日本で大学教員となっているケースが少なくないことが挙げられる。

2. 2 調査の目的と方法

今回の聞き取り調査は、J-PAC 参加者へのフォローアップ調査の一環として行った³⁾。

目的は、J-PAC 参加者にとって短期留学はどのような意義があったか、帰国してからの経験はプログラムの評価にどう影響しているか、また、社会人となった参加者へのフォローアップ調査から何を学ぶことができるかを探ることにある。

中国での調査は、派遣元である協定大学 2 校の教員の協力を得て、修了者 6 名に対して実施した。個別のインタビューではなく、全員が一堂に会して話し合う、グループ・インタビュー（ヴォーンほか 1999）の方法を用いた。インタビューは約 1 時間 40 分、日本語で行った。

協力者の簡単なプロフィールを表 2 に示す⁴⁾。来日時期は 2003 年から 2013 年までで、全員 1 年間千葉大学に在籍した。インタビューを行った 2015 年 3 月現在、A さん、C さん、E さんの 3 名は中国で日本企業または日系企業に勤めており、B さん、D さんは大学院に在籍して日本語研究者の道を歩んでいた。F さんは調査時にはまだ派遣元大学に在学中であった。全員インタビュー時において日本語、日本人との関わりをもち続けていた。

表 2 調査協力者

	在籍期間／短期留学修了後の年数	来日時の在籍大学での身分	性別	インタビュー実施時の身分
A	2003 年-2004 年／11 年	学部生	女	会社員
B	2005 年-2006 年／9 年	大学院生	女	大学教員・博士課程在籍
C	2006 年-2007 年／8 年	大学院生	女	会社員
D	2007 年-2008 年／7 年	大学院生	女	博士課程在籍
E	2009 年-2010 年／6 年	学部生	女	会社員
F	2013 年-2014 年 1 / 1 年	学部生	女	派遣元大学 4 年生

インタビューでは、「短期留学のよかった点」、「短期留学における交友関係とその継続」、「短期留学によるものの見方や考え方の変化」、「短期留学中の残念だったこと」を中心に参加者に自由に話をしてもらった。筆者は進行役を務め、発言した人からより詳しい説明を求めたり特定の参加者のみに発言が偏らないよう声をかけたりした。

2. 3 分析方法

インタビューは許可を得て録音し、文字化を行った。グループ・インタビューのデータ分析の方法を参考に、「参加者の基本的な考え」、「発言に用いた言葉の選択と意味」、「他者の発言によって作られる文脈」(ヴォーンほか 1999: 133-134)などに留意して、分析した。多くの参加者があいづちを打って同意したり情報を付け加えたりするような発話は、このグループに共有されている内容と考え、この点にも注目するようにした。

また、帰国してから 1～11 年経過しており、各自の人生経験によって、同じできごとに対しても見方、感じ方が変化していることも予想される。留学中の経験の捉え直し、再評

価も分析の観点の一つと考えた。実際、発話の中には、留学前、留学中、留学から帰国した時、現在（インタビューの時点）という4つの時間が表れた。インタビューにおける評価的なコメントが、留学当時のものか、帰国時のものか、現在のものか、「当時」、「（日本に）行ってみたら」、「今から考えると」、「今考えても」などのことばを手がかりに分析を行った。

3. 調査結果

3. 1 結果の概要と分析

まず、インタビューで言及された内容を、学業、学生交流、日本・日本人についての知識・理解、ものの見方、千葉大学への留学経験、施設、イベントに分けて整理し、分析する。

全般的に肯定的な評価が付与されることが多かったが、網掛け部分では否定的な内容を含むコメントである。括弧内の数字は同様の発言をした人数を表す。同意した人数が特定できない場合は（複）、大学院生としてJ-PACに参加した人のみの意見の場合は（院）とした。

● 学業

- ・留学中に論文を書く経験ができたこと⁵⁾が、帰国後の卒業論文・修士論文の作成に役立った。(2)
- ・レポートの書き方を勉強したのが卒業論文の役に立った。(1)
- ・授業での勉強がその後の（自分の）日本語の授業や研究に繋がっている。(1院)
- ・研究のおもしろさがわかり博士後期課程に進学することにした。(1院)
- ・図書館で日本語の本を読む機会が少なかった。もっと勉強しておけばよかった。(2)
- ・2学期目は日本語の授業より学部の授業をもっと取って勉強すればよかった。(2)
- ・学部専門科目は難しすぎて途中で諦めたものがあった。(1)
- ・専門（語学）の勉強以外に自分が興味のある分野の授業を聴講したが、単位も取ればよかった。(1院)

学業面では、論文作成や研究への動機付けが高く評価されていた一方で、より多様な授業に参加したり、図書館の本を活用して知識を増やしたりすればよかったという意見も少なくなかった。

J-PAC生全体を対象とする帰国前のアンケートに頻出する「日本語が話せるようになった」というようなコメントがなかったのは、このグループの多くが来日時にすでに上級レベルの日本語能力を有していたことを反映しているものと思われる。

● 学生交流

- ・チューターなど日本人学生との付き合いが帰国後も継続している。(3)

- ・同じ寮に住んでいた他国の留学生と付き合っているいろいろな国の文化に触れた。(2)
- ・チューター以外の日本人学生との交流の機会、深い付き合いがなかった。(2)
- ・他国の留学生との交流は少なかった。(3院)

他国の留学生との交流が少なかったというコメントは、大学院留学生に共通している。語学としての日本語の授業を受講していないと留学生同士が親しくなる機会が得にくいのが一因と考えられる。

チューター以外の日本人学生との交流については3. 2でも取り上げる。

● 日本・日本人についての知識・理解

- ・日本に行く前持っていた日本のイメージが自分の目で見たことによって変わった。(4)
- ・日本での体験が、職場の日本人同僚と話すときの話題になる。(複)
- ・アルバイトでミスをしたとき日本語での謝り方を教わり、今も役に立っている。(1)
- ・日本にいる普通の日本人の中国に対する考え、中国で働いている日本人の中国に対する考え、両者の違いがわかるのでコミュニケーションがスムーズにいく。(1)
- ・アルバイトで正直ではない日本人に出会い、心が痛かった。(1)

卒業後の職場でのコミュニケーションと関連づけた意見が多かった。アルバイトでの経験の振り返り、日本・日本人のイメージの変化については3. 2で取り上げる。

● ものの見方

- ・ものの見方や考え方が変わったと思う。(複)
- ・当たり前と思っていたことが、外国から来た学生にとって全然常識ではないと思う部分もあり、いろいろな方向からものを考える力がついた。(1)

ものの見方や考え方の変化についてはほぼ全員が異口同音変わったと述べていた。

● 千葉大学への留学経験

- ・「いい大学」としてほかの中国人に勧められる。(1)
- ・仕事で出会った日本人が偶然千葉大学とゆかりがあり、親近感を持たれた。(2)

仕事で出会った日本人と個人的な話をする場面で日本への短期留学が話題になりやすいことは想像にかたくない。日本人との関係作りに役に立った事例が2名から紹介された。

● イベント

- ・見学旅行が楽しかった。(全員)
- ・母と学生の会の活動が楽しかった。(3)
- ・ホームビジット・ホームステイの家族と今でも手紙のやりとりがある。(2)

● 施設

- ・キャンパスが東京に近いのがよかった。(全員)
- ・寮は個室で安い、安全・安心、便利でよかった。(全員)

寮については、設備の老朽化、寮費の値上げなどの要因もあり、最近の帰国前アンケートにおいては評価が低い項目となっている。インタビューでは、来日前の8人～10人部屋での寮生活と比較するコメントが複数の協力者から聞かれた。

3. 2 評価の変化

本調査の協力者は、学部在学中のFさんを除き、帰国後5年以上経過しており、様々な社会経験をしていると考えられる。本節では、この間の時間の経過が、留学中のできごとの捉え直しに結びついていると考えられる事例を見ていきたい。

3. 2. 1 学生交流

J-PACに参加する学生、特に学部生は、日本人学生との交流に大きな期待を持って入学してくる。チューターおよびチューター以外の日本人学生との交流については、帰国前のアンケートでも毎回尋ねており、2015年の帰国前のJ-PAC生に実施したアンケート⁶⁾では、日本人学生との交流は、「十分あった」が42%、「ある程度あった」が39%、「あまりなかった」が19%となっている。選択肢が異なるものの、同じアンケートにおけるチューターに対する評価は、「とてもよかった」56%、「よかった」23%、「普通・不十分だった」21%となっている。チューターに対する満足度のほうが上回っており、現在のプログラム参加者の場合も、チューター以外の日本人学生との交流は必ずしも期待通りではないことが窺える。

インタビューの中には、日本人学生との友人関係の作り方について以下のようなコメントがあった。当時大変だったことが時間が経って変わってきたかという問いかけに対するものである。

本当は今考えれば、どこの国にいても同じ中国人同士でも会社の同僚でも本当は大体同じようなやり方で友達を作りますね。会社に入って誰もわかんない、知らない、たぶん誰か気を使って話しかける人がいるんですけど、やっぱり一人ぼっちっていう感じがします。何か仕事のチャンスとかきっかけとか、議論し始めて議論するときは必ず話題が広がっていくんで、例えば趣味だとか出身地だとかいろいろ話し合って、やっぱり共通のものを持ってから、もっと深い付き合いをして、で、同じ価値観とかを共有できる人は最後友達になる。そのリンクは同じですね。

チューター以外の日本人学生と深い付き合いが少なかったという話が出る中で、この参

加者は新しい場所で友達を作っていく過程がどのような場合も似たようなプロセスをたどるという認識を述べている。「今考えれば」という言葉から、時間の経過とともに日本での経験を相対化して見るようになったと推測される。

また、交友関係を深めるのに積極的になれなかった経験と関係を深められた経験、そしてその理由を分析する、次のようなコメントもあった。ここでも「今思えば」、「同じ中国人同士でも」という言葉が相対化の手がかりになる。

例えば、相手が中国の人だったらすぐ誘って一緒に買い物に行ったり遊びに行ったりしようって、誘うのは勇気があるっていうか日本人の学生だと嫌われるかもしれないし、できるだけふだんの話だけで。勇気がないんですね。(中略) 今思えばもっと積極的に誘ってもよかったのに。逆に向こうもそういうふう考えているかもしれない。

国が違うだけでなく、同じ中国人同士でも同じ話題がないとなかなか話が始まらないですので、もっと日本に行く前に日本のことを勉強したら、最初の話題ができたなら、もうすぐ先生とかの話とかすれば盛り上がりますし。例えば私が日本に行く前に漫画を読んだりして、日本人の若い人たちも漫画が好き人が多いので、大体そこから話が始めると、あの漫画好きなんだとか、あの時代の日本の歴史が好きなんだとか戦国時代とか話が始めると、「あそこでコミケがある一緒に行こう」とか「イベントがあるから見に行こう」というチャンスができるならば、もうすぐだんだん。日本人学生がわりと私よりシャイな人が多いのでこちらから積極的に誘って一緒にイベントに一回行ったら必ず次は逆に向こうから誘ってくるんで助かりますね。だんだんそういうキャッチボールって言う感じになると。一ヶ月、二ヶ月たったら友達になるっている経験がありますよ。最初の話題が大事です。

中国人と日本人の間に壁があるという見方を紹介しながらも、飲み会をきっかけに研究室の人たちと親しくなった自身の経験を捉えたコメントもあった。

文化とか考え方が違うからやっぱり中国人と日本人には壁があるそうです。交流はこんなにちとは好きなものは何ですか、そういう浅いものだけで深いものがほとんど見たことがないです。

研究室に入った時は確かに最初は寂しい感じです。周りは日本人多いけどなんか挨拶だけのレベルのような、そういうような話が多いですが、大体一年間くらい挨拶の関係で、で、あとはその日、周りの人と先生が**さん一緒に飲みましようかって、私、実はお酒は飲まないけど、はい一緒に行こうって。行ったらやっぱりサワーとかお酒

とかやっぱり一緒に食べて、お酒を飲んで、次の、ま、その時から、やっぱり親しい関係があると思います。やっぱり距離感は自分の心の考え方だけじゃないかなと思います。先に自分をオープンにしてチャンスも探して、それはした方がいいと思います。最初は無駄になった感じです。悔しかったです。

距離感からくる寂しさは自分の心の問題であったという気づき、「自分をオープンにしてチャンスを探す」必要性の気づきがここから読み取れる。

以上の3人の発言からは、当時の自らの行動や感情を省察し、相対化して、人間関係の構築に関する自分なりの見方を持つようになったことが窺える。

3. 2. 2 アルバイトの経験

インタビューでは、アルバイトでの経験を振り返る中でも捉え直しが見られた。

たとえば、アルバイト先で二千円札を五千円札と間違えて、お釣りを三千五百円出してしまったという経験をした協力者もいた。

二千円いただいて三千五百円のお釣りをしたんですね。つまり私の方から三千円お店の方にささなきゃいけない。どうしてその日本人は、彼は知ってたはずですよ。どうして教えてくれなかったんですか。本当に心が痛かったです。三千円は大金でした。つまり一日四時間ですけど無駄になりました。ちょっと悔しいです。もっとよく見ればよかったのに。いい経験になりました。

それまでは「日本人はみな正直な人」と思っていた協力者にとって、この経験はアルバイト4時間分のお金が無駄になる、心が痛い経験だったが、今は「いい経験になった」と再評価をしている。

また、食品販売のアルバイトをしていた協力者は、出来上がって10分経つとすぐ捨てるルールであったのに、たまたまこっそり食べていたとき店長に見つかってしまったという。この経験から学んだことを次のように話している。

私は朝ごはん食べてないですけどもって言い訳を探しますが、隣の日本人の高校生がすぐなんか「謝れば先に」って言って、私はその時謝りました。なんでこれが一番印象深いかというと、今仕事上ミスとかよくあるんですよ。そういう時は普通の中国人は大体は、なんとかなんとか言い訳をしましたけど、私は（中略）もし何かあったら「すみません、申し訳ございません」は最初に言います。

この経験は今の職場でも役に立っているとして、留学したことのない同僚中国人と自分の違いだとも述べている。苦い経験であっても、そこからの学びが実地に役立つことで、いい経験、役に立つ経験に変わることが具体的に示されている。

3. 2. 3 日本・日本人のイメージ

日本語専攻の学生であった協力者たちは当然ながら来日前にも日本・日本人に対するイメージを持っていたはずである。留学前の日本のイメージ、留学中に観察したことをもとに、現在の中国人に対する洞察に結び付けるコメントもあった。

日本人がみんな仕事忙しいので歩くスピードも普通の人よりも速いというようなイメージがあって、でも本当に行ってみたら歩くスピードがあるんですけど、内面的にはそんなにイライラする感じはないですね。逆に今の中国人はみんな焦ってる。すごくイライラしてるんですね。それも一回行ってみて、今中国は、日本のたぶん昔のいつかの様子と同じなのかなって感じてます。

また、社会人としての経験を学生時代の経験と比較し、自分の日本人に対するイメージが変化したことを説明するコメントもあった。

仕事で付き合っている日本人スタッフと、その時付き合っていた日本人の学生と結構違いますね。今から考えるとその時の先生も隣の人も周りの日本人学生もみんな優しくかったんですね。例えば、一人がゼミに入っただれも知らないですけど、みんな話合っているんで、一人で座っていて誰も話しかけてくれないんですけど、先生が来たら必ず中国と関係のある質問をしてきたりするんで、話させられるんですけど、会社に入ってくるとそんなに気を使ってわざと君と関係があるように話のチャンスを与える、そういうチャンスはほとんどないんですね。直接仕事の話に入るんで、自分なりに考え方とか自分の意見とか話さないと、もうアウトって感じがするんで。なので今振り返って考えると、その時作った日本人に対するイメージがある程度誤解しているかもしれないと思う。

さらに、日本人学生とのやり取りを通して相互にイメージのギャップが存在することに気づいた経験をもとに、自ら「日本で見たこと聞いたことを中国の人に伝える義務がある」として留学の意義を端的に述べるコメントもあった。

確かに周りの人は日本にいたことがないから本当の日本の姿を把握することができないと思うんですね。ですから私たちの役目はやっぱりこの専門を選んだ以上、自分が日本で見たこと聞いたことをこちらの人に伝える義務があると考えています。

4. まとめ

本調査では、中国協定大学から受入れた日本語専攻の短期交換学生のうち、帰国後1年～11年目の6名の協力を得て、プログラムの意義を尋ねるグループ・インタビューを行った。

3. 1に記したように、インタビューでは参加したプログラムの様々な側面が取り上げられたが、概ね評価はよかった。

「学業」に関しては、6人中5人が具体的に評価できる点を示しており、論文作成のような研究方法の学習や研究のおもしろさに気づいたことが高く評価されていた。一方、より専門的な授業への参加のしやすさ、現在の仕事に役立つような授業の正式な受講などがプログラムの課題として、また、読書量、すなわち自主的な勉強量の少なさが自らの反省点として挙げられた。社会に出てからもっと勉強しておけばよかったというような後悔は留学経験者に限ったことではないが、日本と関係のある仕事をしている本調査の協力者だからこそ、日本人と同様の一般教養や業務と関わる専門知識を得ておきたかったという思いが強いのではないかと考えられる。

「学生交流」に関しては、チューターとは帰国後もなお交流が継続している人が半数であったのは喜ばしいことであるが、チューター以外の学生との交流に関しては否定的な評価や物足りなさがあったことが読み取れる。

また、「日本・日本人についての知識・理解」については、留学によりイメージが変化したこととともに、職場における日本人とのコミュニケーションにおいて、日本人の中国観、日本語での謝り方のような語用論的知識、日本に関わる話題を共有できることが役立っていると具体的に指摘された。

「ものの見方」で示された、他国の留学生との交流で視野が広がったという評価は、プログラムの帰国前アンケートでもしばしば言及される点で、多様な背景の学生がともに学び、寮で交流する機会があるのは本プログラムの評価すべき点として考えられる。

本調査の協力者よりやや早い2000年代前半に日本に留学した中国人について、留学経験が就職活動やキャリア形成に与える効果を研究した徐・阿部(2012)では、①語学力、②日本の文化や習慣、社会等を知ることができたこと、③視野を広げたこと、④新しい価値観が形成されたことが、プラスに働いていると指摘されている。徐・阿部(2012)の聞き取り調査の対象28名中交換留学生は3名でそれ以外は学位取得を目的とした留学であったが、全体的には本調査の結果と一致する点が多い。ただし、徐・阿部(2012)がマイナス面として挙げた「授業料・生活費を稼ぐためのアルバイト」のせいで勉強する時間が不十分だった、大学生らしい生活ができなかったという指摘は、授業料が免除される本調査の対象プログラムの場合には当てはまらないように思われる。

J-PACでは、1学期目は新しい環境に慣れ、学業に専念することを奨励し、アルバイトは1学期の授業終了後に認めるという方針を取っている。現状では、積極的に勧めてはいないが、日本と関わる職業を選択する可能性が高い参加者にとっては、インターンシップ

あるいはアルバイトなどによる職場経験から学べる点も少なくないことが示唆された。

3. 2では、経験の再評価について具体的な例を紹介した。現在の視点に立って、留学時の自らの行動や感情を省察したり、当時の相手の気持ちを推し量ったりして相対化するケースや、苦い経験を今に役立つ「いい経験」として捉え直すケース、当時のイメージを修正したり、自分の文化を理解する鏡として日本を考えるケースが見られた。

プログラムの改善に向けてフィードバックがどのように役立つかという観点から見て、本調査から学べることは、帰国後の経験、特に社会人としての経験を経て、プログラムで経験したことが再評価されることが具体的に確認できたことである。J-PAC参加者が戻っていく社会における日本語の価値、その後の経済状況などの条件にもよるであろうが、帰国前のアンケートのようなプログラム直後の評価は絶対的なものではなく、参加者個人もプログラム実施主体である大学も、長い目で評価を考えることがあってよいのではないだろうか。参加直後のフィードバックには、寮の設備や個々の授業のあり方のように現状に即して対応が必要な情報も多く含まれているが、それとは異なる次元で留学生交流を捉える視点も必要である。

2013年にグローバル人材育成推進事業が採択されて以降、千葉大学では英語で日本を学べる授業が増設されるとともに、アクティブラーニング、協働学習を通じた学びを重視するようになってきている。中国からくる日本語専攻の学生も、日本人学生を含む多様な背景の学生たちとともに英語で学ぶ経験をするのが少しずつ増えてきた。また、中国でも地域によって日本語学科の卒業生が日系企業、日本の大学院より欧米企業への就職、大学院留学を目指す傾向見られることが指摘されている(見城・三村・中嶋・菅田 2015)。しかし、筆者は、こうしたプログラムを巡る状況の変化があったとしても、短期留学生と千葉大学生の双方向の学びの場を整え、日本について学ぶことを通して相互理解を深めるプログラムのねらいには変わりがないと考える。

本調査の協力者は元々協定大学において派遣留学生として選ばれた優秀な学生だった人たちである。調査時にも会社員、研究者として日本と深い関わりを維持してきたグループであったことが結果に大きく影響していると思われることを最後に付言しておく。学位取得を目指した長期留学でもなく、また数週間の協働学習プログラムとも違うJ-PAC参加者の学びをどのように促していくのか、本調査で得た知見や他の参加者からのフィードバックも参考にしながら考えていきたい。

謝辞

卒業生に声をかけて協力者を募ってくださった湖南大学の張佩霞先生、中央民族大学の陶芸先生、インタビューに快く協力してくださった元留学生の皆様へ御礼申し上げます。また、現地を訪問する機会を与えてくださった元国際教育センター長、新倉涼子先生には、グループ・インタビューにも同席していただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

注

1 短期分散受入れと短期留学国際プログラム（J-PAC）を分けていた時期に留学した分散受入れの交換留学生に対しては、当然のことながら当時は「J-PAC」という名称を用いていなかった。本稿では協定大学から10月に一斉に受入れ、並行して実施していたプログラムであることに鑑み、分散受入れと短期留学国際プログラムをまとめてJ-PACという名称を用いて整理することとする。

2 日本語能力の高いJ-PAC参加者と日本語・日本文化研修留学プログラムの参加者は、修了要件などが若干異なるものの、合同の授業を行うなど受講する授業が重なるため、同じグループと見なして指導することが多い。

3 J-PAC参加者へのフォローアップ調査は2015年3月から5月にかけてアンケート調査と聞き取り調査を行った。ウェブでのアンケート調査はJ-PAC修了者全員を対象にSNSなども利用して協力を依頼した。聞き取り調査を実施したのは本稿で取り上げる中国とタイ（バンコク、7名参加）の2か所である。ウェブを使った調査は、中国の出身者から得られた回答は10名と回収率が非常に低かったが、結果は以下のとおりである。

回答者数：10名（1999年から2012年までの参加者で全員日本語専攻）

概要：6名が学位取得のために日本の大学に戻っており、現在日本に住んでいる者が半数である。中国在住者のうち、企業、大学で日本と関わる職についている人が3名であった。「千葉大学での短期留学の経験は、あなたの経歴に影響を与えたか」という質問に対し、全員が「とても影響があった」と評価している。「どのような影響があったか」に対する答え（10名中9名が記入）は以下のとおりである。

- ・日本語レベルアップはもちろん、人生観や価値観または日中関係に対する考え方が大きく変わった。
- ・日本語力が上がった。世界に対する認識が豊富になった。研究方法を身につけた。
- ・日本の文化や考え方などが留学で身をもって経験したからこそ、仕事上の異文化（事務のやり方など）も留学経験のない同僚より早く慣れた。
- ・日本文化・社会に対する理解を大いに深め、後日の仕事にとっても役に立った。
- ・日本で働くこと決意した。
- ・日本語が話せるようになった。帰国後教員になったのも、今日本の大学で勉強しているのも千葉大学の留学経験と関係がある。
- ・留学した後、博士後期に入りたくなった。
- ・多文化に溢れる環境において人々とうまく交流できるようになった。
- ・自信を持つようになった。

4 6名の出身大学は湖南大学または中央民族大学である。個人的な経験が含まれることから、個人の特定を避けるため表では出身大学名を記していない。また、正式にはJ-PACのプログラム参加者ではなかったが、協定大学からの派遣留学生で日本語能力やニーズの面でJ-PACの学生と同じで、在学中はプログラムの授業、ガイダンス等に参加できるようにしていた人を含む。

5 「留学中に論文を書く経験ができた」としたのは学部生として留学した2名で、約10か月間かけて日本語で研究レポートを作成する、短期留学生向けの授業（「特別研究（文系）」）で作成したレポートを指している。

6 この年の J-PAC 参加者は 17 か国 43 名であった。留学生の属性による交流範囲や満足度の違いも予想されるがここでは立ち入らない。

参考文献

S. ヴォーン・J. S. シューム・J. シナグブ (1999) 『グループ・インタビューの技法』(田部井潤・柴原宜幸訳) 慶應義塾大学出版会 (Vaughn, S Schumm, J. S. & Sinagub, J. 1996. *Focus group interviews in education and psychology*. Sage Publications.)

見城悌治・三村達也・中嶋英介・菅田陽平 (2015) 「現代中国における大学生に対する『日本事情』ニーズ調査」『国際教育』8、51-76.

徐亜文・阿部康久 (2012) 「日本留学経験が就職活動とキャリア形成に与える効果に関する研究—中国人帰国留学生を事例として—」『九州大学留学生センター紀要』第 20 号、67-83.

日本学生支援機構「学生支援に関する各種調査」

<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/index.html> (2017 年 2 月 23 日閲覧)

野水勉 (2006) 「英語による『短期留学プログラム』がもたらした国立大学の国際化—短期留学推進制度の 10 年—」『平成 15-17 年度科学研究費補助基盤研究 B (2) 国際戦略としての教授用語の英語化—短期留学プログラムの多国間比較研究』(研究代表者恒吉僚子)、13-27.

